

# 東京未来ビジョン懇談会（第7回）

---

平成30年2月6日（火）

## —議事概要—

## 東京未来ビジョン懇談会（第7回）

平成30年2月6日

**【岩瀬次長】** それでは、定刻になりましたので、ただいまから第7回「東京未来ビジョン懇談会」を開会いたします。本日の進行役を務めさせていただきます東京都政策企画局次長の岩瀬でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、会議の公開についてご説明いたします。

本日の会議の様子は、東京都のホームページ上でインターネット中継により配信されております。

報道機関の皆様は、懇談会の冒頭からプレゼンテーションに関する意見交換まで、取材が可能でございます。

本日のプレゼンテーション資料、議事概要、中継映像につきましては、ホームページ上に公開して参ります。また、懇談会のアウトプットに関する資料につきましては、アウトプットの公表に合わせて公開させていただきます。

本日の次第及び会議資料はタブレット内に入っております。タブレット内の資料は自動的に説明時に動くようになってございます。

なお、本日、パトリック・ハーラン様は所用のため少々遅れて来られます。

それでは、開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶をいただきます。知事、よろしくお願いいたします。

**【小池知事】** 皆さん、こんにちは。いつもお忙しいところ、このビジョ懇にご参加いただき、ありがとうございます。インフルエンザもはやっているようで、何人かかかってしまっているようで、早く治ることを期待しております。

それから、太田さん、ご結婚、おめでとうございます。

**【太田雄貴様】** ありがとうございます。

**【小池知事】** さて、このビジョ懇も1周年をもう迎えようとしております。先日、来年度の予算案を発表いたしました。一国の予算に匹敵するぐらいの規模なんですけれども、ポイントは、これからますます人口は減る、高齢者は増える、そういう中で、この東京は加速度的に超高齢社会に突入していく中において、今、何をすべきか。ここのポイントできちんと対応していかなければ、その後、急激にばーっと落ち込むことが心配される。そ

のために何をすべきかということで、もちろんこれからのオリンピック・パラリンピックへの備えもありますけれども、一方で、やはり人に焦点を当てて、人が元気で、そして、人が活躍できる、それが持続可能な首都東京の姿を支える一番重要なファクターだと考えて、予算に盛り込んだところであります。

まさしくビジョ懇で議論をしていただいているのは、その人の部分をどうやって、夢であるとか希望、これからの世代の人たちがどういうビジョンでもって進んでいったらいいのか、こんな東京がいいな、あんな東京にすべきだ等々、率直なご議論をいただいていたところでございます。今日は、ピアニストの菊地裕介さんがプレゼンターで、特に芸術・文化の観点から東京の未来について語っていただきたいと思います。

それから、1周年がもうやってきたということで、アウトプットについても、この後、議論を進めているわけでありまして、途中で座談会に切り替えまして、そして、皆さんで2050年の東京の姿についての大詰めのご議論を行っていただきたいと思っております。そこからは、本当に忌たんのないと言うか、「えっ、嘘、こんなことを言うの」みたいな、そういう議論に発展すればということで大変期待をいたしております。ここはもう皆さんにお任せいたします。

ということで、マスメディアの方は、そこのところはパスしていただいて、生の議論を是非皆さん同士でやっていただきたいと、このように思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

**【岩瀬次長】** ありがとうございます。

本日の懇談会では、まず、菊地様にプレゼンテーションをしていただきます。その後、東京の未来や東京の可能性などにつきまして、メンバーの皆様全員での意見交換を行い、おおむね18時30分頃の終了を予定してございます。

それでは、ここからの進行は知事をお願いいたします。

**【小池知事】** それでは、時間もないことですから、早速、プレゼンテーションを菊地さんの方からお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

**【菊地裕介様】** お願いします。皆さん、こんにちは。ピアニストの菊地裕介です。僕はふだんピアノを弾いたり、教えたりということをやっているわけですが、今日のプレゼンのタイトルは「ふれあい文化都市『東京』」、人類の歴史に出現したこの巨大都市「東京」で、人々は真に文化的な生活を営むために何と向き合っているのか。伝統と未来と新技術が協調することで、人はどのようなコミュニケーションを図ることができるのかと、

ちょっと大層なことが書いてありますけど、要は人は何を楽しみに生きているのかという  
ようなことを、昔と現代と未来という3つの観点を通してちょっとお話しさせていただ  
こうと思います。

お願いします。これは僕が演奏しているんですけど、いきなりですが、ちょっと日本国  
憲法をひもといてみましょう。第25条、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を  
営む権利を有する。」とありますけれど、ここに重要なキーワードが出てきますね。生活と  
いうことですが、ここに1つ、「なぜ人は働くのだと思いますか」という調査結果が  
ありますけど、ここに生活というのがありますね。あと、趣味とか、自分の成長とか、そ  
ういったワードが並んでいます。この生活がライフ、働くはワークと、この2つを組み合  
わせてライフ・ワーク・バランスと、大事なことだと思うんですけど、僕はその先に「ラ  
イフワーク」というものをやっぱり見出していきたいと思っています。

およそ100年前の1920年ですけれども、日本の人口の約半数が農林水産業に従事していま  
した。これはまさに生きるため、生存するために仕事をしていたということですね。これ  
が現代になると約3%まで低下しています。それだけ人は働かなくても生存できるよう  
になった。じゃ、何のために生きているのか、何が仕事なのか、何が趣味なのか、そうい  
うことは、実は農耕社会になってから、人は考えるようになったらしいんですけども、そ  
の前は狩猟社会だったわけで、その時のまさに生きるためにやっていた狩猟ですね。それ  
は、もう貴族の趣味に今はなっちゃっているわけで、貴族的な趣味になってしまっている。  
だから、何が趣味で何が仕事かというのは、位置付けはとても難しいかなと感じます。

2017年の流行語大賞となった「インスタ映え」ですね。これは、人々がクリエイション  
とコミュニケーションを必要としていることを象徴していると思います。これはまさに「ふ  
れあい」ですね。それが文化の原点だと僕は感じます。音楽は「ふれあい」の在り方とし  
て独特なポジションがありまして、僕らは楽譜を読むだけで、音にしないでも感動でき  
たりするんですけど、普通に考えれば、作曲家がいて、演奏家がいて、聴き手という、この  
3者がそれぞれに「ふれあう」ことで音楽は成り立つものですね。

演奏というのはその瞬間には消えちゃうものです。音楽というのは、特定の解釈とい  
うのをする必要はありません。自由です。もっと具体的な台本を持つようなオペラのような  
作品でも、題材として取り上げられているのは、古代ギリシャだったり、エジプトだつた  
り、時代も空間も超えた人の心の在り方というものに、そのものに寄り添っているとい  
うものですね。そんな音楽、でも、作曲された年代というのは比較的新しくて、せいぜい17

世紀以降なんですけれども、それでも今、2050年だとか、100年前だとかという話をしている、そのスパンよりもずっと長いものであります。それだけの歴史を持ちながらも、音楽はその瞬間にまたこうやって生み出されるものなので、常にリニューアルオープンみたいなものですね。ですから、これは色あせていくものではないと僕は考えます。

そして、自分で演奏するという事は、これはまさに自己実現であって、過去のクリエイターのつくった遺産の力を借りて、そこに共感し、読み解いて、それを自分のたった1つの人生に照らし合わせてよみがえらせる、これをなりわいとすることがないにしても、これを学び続けることに熱狂する人々の数というのが実は年々増加しているんですね。これは僕の属するある組織の主催するイベントの参加者なんですけれども、どんどん右肩上がりで増えています。今はまだ生活や時間に余裕のある層がメインとなっているんですけれども、これから、あらゆる仕事の生産性というものが向上して、ライフ・ワーク・バランスというものが確立していけば、全ての人がライフワークというものを目指すと言うか、そちらに向かえる道筋が見えてくるかなと感じます。

さて、未来についてちょっと考えてみましょう。僕は、大学では教員という立場で、これはAIによって淘汰されるかもしれない職業と言われますけど、実はそれは危惧するばかりじゃなくて、僕は、いつそこんなことはAIがやったらいいんじゃないかと思うような場面も、日頃たくさん存在するんですね。AIを活用することで現状のコストで教育をもっと充実させることもできるだろうし、現状の教育をもっと安く、安価に提供するという方にも応用できると思います。そういうふうにしていけば、みんなのレベルがどんどん上がっていくと感じます。

また、現在では、実現に巨額のコストがかかる大編成の作品の演奏、オーケストラですね。これもAIの指揮者であるとか、AIの演奏者というものが助けてくれるようになれば、よりずっと身近になると感じます。全てがAIによる演奏というのも、ただ鑑賞するというふうに行き着くかどうかとは、何とも言えないんですけれども、人々の共感だとか、連帯という気持ちを満たすに当たって、AIが少しずつ加わっていくということは、その感受性が時代と共に変わっていくんじゃないかと感じます。

あと、作曲についても、ゴーストライターという存在の事件が最近ありましたけど、設計図に基づいて曲をつくるというようなことは、AI作曲家も今後できていくんじゃないかと思うんです。その出来た作品をみんなが共有するような、第九とか、そういう社会現象になるような作品になるかどうかはともかくとしても、人々がそれを趣味としてやって

いくことはできていくんじゃないか。その可能性が出来れば、今まではただ消費するばかりだった人たちも、クリエイターの側にきっと回っていくと感じます。

最後のAI聴衆ですけど、これはロボットが並んでいるというのを想像してもいいんですけど、あるいは自分の方がバーチャルな空間に入って演奏する。そして、その自分の演奏に対して反応して、共感して言葉を掛けてくれるような仮想ファンというような存在というものも考えられるかなと思います。

ただ、こういうことが広まれば広まるほど、やっぱり本物の価値、そこへの欲求に駆り立てられるようになっていくと感じます。コンピューターで簡単につくれることであっても、それを苦勞して自分の手で生み出す、その瞬間の快感というもの、これはやはりまさるものはないんじゃないかと感じます。これはもう人間のさがと言って、多分変わらないことだと思います。20世紀以降、テクノロジーというものはすごく進化したわけですけども、実はピアノという楽器は、19世紀末においてほぼその基本形態は進化を止めているんです。これも何かを示唆しているかなと。人間の感受性と言うか、受容できるもの、扱うのも人間と、そういうことがあるかもしれません。

ところで、今、ピアノのような楽器というのは、特別な教育を受けた人にしかできないものになっていますけど、もともとはもう貴族であるとか、世襲の音楽家にしかできなかったことなんですね。それがもう今では日本で広く庶民にも行き渡っている。これは本当にすごいことです。輸入品でヨーロッパの方の本場とは違うんだとおっしゃることもあるんですけども、僕は東京で生まれ育って、かつ、ヨーロッパでも暮らしていましたけど、そんなのは謙遜でしかないなと僕は感じるんです。日本では、どこの学校に行ってもピアノが置いてあるんですね。これは色々な所にアウトリーチ公演をしているので、よく目撃しているんですけど、そんな国はほかにないんじゃないかと僕は思います。ですし、世界最大の楽器メーカーというのは日本にあるんですね。それも複数あります。どこの住宅街でもピアノ教室というのが生活に根付いていると思うんです。

そして、東京に目を向ければ、これは都心の多くのビルに、今では、天井が高くてオープンなスペースがたくさん出来て、丸の内とかでは「ラ・フォル・ジュルネ」というようなイベントがありまして、アトリウムコンサートだとか、色々そういう20年前ではとても考えられないような数のオープンスペースのコンサートが今開催されている。そして、クラシック専用のライブハウスみたいなものも各地に、銀座とか、赤坂とかに在って、お客さんもちゃんとついているんですね。若い人たちはそこを研さんの場とするようになって

いる。そういう都内のあらゆるまちに学習者のためのステーションみたいなものも組織されて、演奏イベントが開かれています。こういうのは一過性のものじゃなくて、本当に根付いてきている証だと思うので、こういうムーブメントがどんどん続いていけば、東京は自信を持って「ふれあい文化都市」というふうに名乗ることができるポテンシャルが僕はあると信じています。

1つ、課題は居住環境。もともと日本の住宅は、そんなに消音性能が高いわけではない。割に近年はプライバシー意識の向上というのもあって、楽器演奏のハードルというのは高くなる一方です。ただ、その代わりに、防音の技術というのも向上してきていますし、貸しスタジオ、貸し練習室というような施設も日に日に増えてきています。それは、でも、需要があるからなんですね。今後、そういう存在がもっともっと多くの人に身近な存在になっていくと思います。そういうときに、音楽大学の今ある練習施設はもちろんですけど、空き家であるとか、そういう既存のストックというのをどんどん活用する方向にも動いていったらいいなと思います。

行政の方にもその動きはあって、僕の通っている東京音楽大学というのも、まさに今、東京都の協力を得て、市民に開かれるというコンセプトの新キャンパスを現在、中目黒に建設しているんです。これが来年にはオープンします。このような状況で、時代は本当に目まぐるしく動いているんですけども、時代を超えて人の心を動かしてきたものというのは続いていくだろうし、むしろ一層見直されていくだろうと思うんです。

そういう人々の生活の質を高めるということは、人間性そのものを見詰めることだと僕は思います。ですので、そういう人間性の指標となるようなリベラルアーツというものを大切にできる都市がきっと人間の生活空間として生き残っていくことができるんじゃないかなというようなことをつれづれなるままに考えさせていただきました。どうもありがとうございました。

**【小池知事】** ありがとうございました。バックグラウンドミュージック、それもお自身で演奏されている音楽付きで、すばらしいプレゼンテーション、ありがとうございました。

さあ、それでは、今日は菊地さんのプレゼンで音楽、そして、文化というところに触れていただきました。

東京も、2020年のオリンピック・パラリンピックはスポーツのだけでなく、日本の文化を世界に発信するいいチャンスであると考えております。ロンドン大会の場合は4年かけ

て文化をどんどん発信をしていって、それがベースで更に大会後も観光客などを伸ばしたという実績があります。それにかけた文化予算というのが250億かな、すごいんですよ。じゃなかったかな。それぐらい4年間でかけているというので、おお、すごいなと思ったわけでありませう。

さあ、それじゃ、文化、そして、音楽などについて、菊地さんのプレゼンテーションに対してのリアクションを皆さんからお願いしたいと思ひます。

田根さん、行こうか。芸術家。建築も芸術そのものですよ。

【田根剛様】 はい。ありがとうございます。日本でやっぱり成熟社会に向かっているというときに、文化の力は非常に重要だと言われながらも、なかなか認めてもらいにくい環境が現状の社会にはあるんじゃないかというのは日々、建築であり、アートであり、音楽でありというところを見ているとすごく感じる部分があるんです。それは、文化というのが、1つは、多分今、経済の言語で語られにくいというのが引っかかっているのではないか。そのときに、考え方として、自分は、「資産」と「財産」という考え方をしっかりと伝えていかないと多分日本の中で文化が根付きにくいんじゃないかというのを最近、感じております。

単純に、「資産」というのは数値化できるもので、「財産」というのは数値化できないものだ。そういうときに、例えばイタリアなんかは、僕は、すごく頭がいいと思っているんですが、あれだけの文化・芸術、歴史というものを数値化しないようにしながら、ちゃんと経済を長い時間動かすような仕組みを考えていると思っているんです。例えば古い建物とか、歴史あるまちとか、それぞれのものを数字に置きかえてグローバル経済に乗せてしまうと、それが売り買いの場に負けて乗ってしまう。その反面、日本は全て資産化してしまうので、建築だったら、資産価値として時間がたつと建物の価値が落ちていく。普通は、建物は歴史と時間と共に価値が上がっていくんですけども、日本の場合は減価償却という形で価値をゼロにしないと償却できないから、文化になりにくいというので、日本は資産価値で物を数字で判断してしまうんですけども、文化というのは、やっぱり人も歴史も時間も財産なので、そこはすごくこれから日本が考え方をシフトしないと、文化というのが根付かないなとはちょっと思っています。

【小池知事】 ありがとうございます。耐震性がどうのこうのと言っていくと、多分日本の木造建築で残るのは法隆寺ぐらいかなと思うんですが、文化について、文化・芸術について、では、山科さん、お願いします。



【山科ティナ様】 山科です。音楽とか文化、アート、絵画もそうなんですけど、やっぱり普通に生活してきて、関わっていないとアートなんて分からないと言う人が多いかなと思っていて、でも、さっき言っていたようなA Iが発達して、もっとみんなが自己実現のために時間を使えるようになって、もっとクリエイティブに、クリエイティブ側に回る人が増えることによって、多くの人が文化とかアートに興味、関心を持つようになって、そこからどんどん文化が豊かになっていくんじゃないかなというのが、すごい明るい未来が見えました。ありがとうございます。

【小池知事】 サブカルも文化ですよ。

【山科ティナ様】 そうです。サブカルチャーとかと言うと、コミケとかあるじゃないですか。結構クリエイティブなことをすることによって、初めて人とコミュニケーション取れると言う人もすごく多いなと思ったんで、もっとそういう人が増えたらいいなと思います。

【小池知事】 ありがとうございます。長谷部さん。

【長谷部健様】 菊地さん、ありがとうございました。僕も「ライフワーク」という言葉は非常にキーワードだと思うとか、やっぱり仕事が減る、A Iに変わってきたりした中で、趣味だったり、自分の自己成長みたいなものを突き詰めていく時代が来ると思うんで、それはA I化したときの楽しみの1つだなと思っていたので、まさにそう言ってもらえるといいなと思いました。

文化について言うと、文化と言うとやっぱりちょっと硬くなってしまって、僕ですら、今、語っていいのかなみたいな、ちょっとひよるところがあるんですが、思うのは、もうちょいみんなが普通に触れられる場所とか、文化を語ることが普通になると言うか、文化と言うと硬いんだけど、例えば最近言われているのは、ナイトタイムエコノミーみたいな話があって、ナイトカルチャーですね。夜のそういった聞く場所だったり、プレーする場所だったりとかやっぱり少ないんで、場所は並行して、当然ニーズがもうあるわけだから、増やしていくことは必要なのかなと思います。

この間、ちょっと変な話かもしれないですけど、センター街にグランドピアノを置いてみたんです。そうしたら、道行く人たちがどうなるかなと思って、ちょっとしたイベントで置いてみたら、やっぱり最初はみんな見ているんだけど、おまえ弾けるだろうみたいな、そこに弾きに来る人は相当自信があるんだと思うけど、やっぱりそこそこうまくて、人が集まってきてみたいなことが起きて、素敵だなと単純に思ったんです。それはズンチャ

カ！という渋谷で音楽イベントをまちを使ってやるという一環だったんだけど、場所さえあれば、機会さえあれば、幾ら恥ずかしいと言っても、そうやって集まってきて、更に人だかりが出来て盛り上がるから、そのきっかけだけがないんじゃないか、ニーズがあるのに、きっかけだけがないんじゃないか、そんなことを感じました。ちょっと例えが変だったかもしれないけど。

【菊地裕介様】 まさにそれです。

【長谷部健様】 ちょっと面白いでしょう、センター街いきなりグランドピアノがあったら。その違和感だけでも面白いんだけど、やっぱり人がそういうのに反応して、できる人は、結構上手な人が弾いて盛り上がっちゃうって、素敵だなと思いました。そういう普通な感じに色々なものがあるといいんじゃないかなと。行政でもしできるとしたら、そういう場をつくってあげたり、そのときの許可をしてあげたりとか、そういったことをもっとやっていくといいのかななんて思います。

【小池知事】素敵ですね。そうやってグランドピアノを1個と言うか、1台……。

【長谷部健様】 そう、ぽんと置いただけで。

【小池知事】 ぽんと置くだけで、みんな、素敵ですね、それ。だんだんここぞという感じでプロみたいな、それこそ菊地さんみたいな方が突然出てきて。

【長谷部健様】 そうそう。突然入ってきたら、また盛り上がっちゃいますね。僕だったら、仕込みで入れておきますけど、菊地君、5時ぐらいに来てと言って。

【小池知事】 菊地さん、今の、はい。

【菊地裕介様】 そういう試みは、例えば空港であるとか、それから、日本でも浜松の駅に一時期、今もあるのかな、ピアノが置いてあって、そうすると自然発生的にこういうイベントみたいになると。だから、仕込むばかりじゃなくて、僕は自然発生するというのがすばらしいことだと思うんですね。そのためにも空間を提供してあげるということはやっぱり大事だと思うんで、僕はいい流れだなと思って見えています。それこそプロの人が弾いたりしているんですよ、僕の友達の「ちょっとワルシャワの空港でピアノがあったので弾いてみました」みたいなのがFacebook(フェイスブック)にまた上がっていたりすると、それにみんな興味を持ってみたいな連鎖的に自然発生して、みんな自分を見たくてたまらないし、見せたくてたまらないというのが根本にあると思います。

【田根剛様】 あと、パリの街なんかですと、パリなんか本当に街中で音楽会が開かれていて、それこそアマチュアの人が弾く場合もあるんですけど、パリ市がプロのオーケス

トラの楽団をメトロの例えば地下の空間に送って、そこで練習がてら公開演奏をするというのも、プロデュースを市がやっているというのは、やっぱり本当に音楽を自分たちのまちの一部にしようとしているというのはすばらしいなといつも思っています。なので、最近、駅に色々なピアノがヨーロッパだとすごく置かれているんですけど、それをちゃんとパリ市は更にもう一歩進めて、市から本当に人を送ってライブの音楽をまちにあふれさせるというのを相当、年度の中でやっているというのは、本当にパリが音楽の街だということをちゃんと生み出して、プロデュースしているというのはすごくいいまちだなと思っています。

**【長谷部健様】** まちの景色にするというのが難しいんだけど、そうなっていくことが必要なんです。そのまちの景色になると、普通にあるというね。それが難しいところだけど、やっぱり取り組んでいかなきゃいけないところかな。色々なことがそうなんですけど、渋谷なんかは、やっぱり色々な人が集まってきて、若い人たちが集まってきてとやっていますけど、でも、例えば原宿のちょっとかわいい系の人とか、普通の景色になっちゃっていて、誰も違和感を思わないよね、そこにいないと困るものになっていたりとか。だから、そういうものが寛容なものとか、あとは、そうそう、アメリカのサウス・バイ・サウスウエストとかちょっといいじゃない？ まちを挙げて、まち中のホール、酒場、全てでライブと、あと先端のテクノロジーを発表していく場になって、その10日間ぐらいはブルースのまちと言われているのかな。あそこは一気に変わるんです。全米中から、世界中からトップ・オブ・トップが集まってきちゃう。多分、東京とかはそういう吸引力があると思うんで、普通じゃできない場所でやれるとなるとそうやって集まってくる。センター街にピアノを置くのもそうだけど、そういうのが少し計算して仕掛けられたら、文化が景色になっていくみたいなことができる可能性があるんじゃないかなという気がします。

**【小池知事】** では、アブディンさん。

**【モハメド・オマル・アブディン様】** 今の話と関係していたんだと思いますけど、10年前だったかな、僕は府中に住んでいまして、よく吉祥寺に繰り出したりしていました。なぜ吉祥寺に出るか。すごく楽しみがあったのは、ストリートミュージシャンがすごく多かったんです。しかもすごくレベルの高い方々。でも、ある時、これは、私はあまり調べてないので迂闊に言えないんですけども、そこにメディアがいます。都の条例で、これは駄目になったと、ある時期からなくなっちゃったんです。ストリートミュージシャンが、演奏できなくなった。これは都の条例だったということは、聞いたことがあるんです。

ね。10年前だったんですね。そういった、やっぱりいかにストリートがミュージシャンに対して開放されるかは大きな課題だと私は思っていますし、当然ながら、今、幼稚園も、保育園もうるさいとおっしゃる方がいるぐらいですから、どこまでこれは許容されるかは分かりませんが、やっぱりいかにストリートがミュージシャンにとって手の届きやすいところにさせるかということは大事なかなと思います。

【小池知事】 ありがとうございます。最近、盆踊りもうるさいとかと言われるという話らしいんですが、さっきのストリートでは駄目とかというのは、歴史、もしくは現状を説明できる人はいますか。

【事務局】 一定の質を保った大道芸人とかストリートミュージシャンの人を登録して、その人たちには使ってもらうという仕組みになっております。

【モハメド・オマル・アブディン様】 それは一定の質に達するために、このストリートで演奏をやるんじゃないかな。

【事務局】 むしろ一般的な道路法なり、道路交通法上の規制をしたいという色々な、先ほどの保育園がうるさいとか、演奏がうるさいとか、色々なことがあった中で、逆に都としては、管理ではなくて、登録制度にすることによって、一定のレベルを持っている人に対しては、この場所とこの場所はやっていいですよというような形にしているという制度なので、別に条例をつくって規制をしたわけではないと思います。ヘブンアーティストと言われている制度です。

【モハメド・オマル・アブディン様】 一定のレベルって何ですかね。一定の質って。

【事務局】 一応審査会を、民間のアーティストでやっています。

【菊地裕介様】 正直、僕は音楽をやっている人間なので、世の中にあふれている音楽を全部、やっぱり批評的に聞いてしまうことがあって、ストリートでやっているのに、うわっと思うことも正直あるんですけども、だから、ふさわしい空間というのは当然あると思うんですね。今、すごく物議を醸しているのが地下鉄の車内でBGMを流すと。それはまたライブじゃないわけです。だから、もちろんある意味では一定の質は保証されているには違いないんだけど、でも、自動的に流れてくるものが、果たしてそれはいいのかと。多少質が低くても、まだ人間がやっていけば受け入れられるかもしれないしという、ここは人の考え次第だと思うんですね。下手くそな演奏は絶対聞きたくないという考えの人もあるだろうし、そういう人たちが文化を支えているんだという意識の人もあるし、それは様々ですね。

【小池知事】 いかがですか。落合さん。

【落合陽一様】 落合です。そうだな。音楽と、いわゆるギャラリーアートみたいなものは結構違うかなと思ってはいて、一番、僕があの中で面白いなと思っているのは、リベラルアーツが「人間性の指標となるリベラルアーツは」と書いてあるところと、文化の結び付きを意識できるということは非常に教養的だなと思うんですね。それが意識できるユーザーはすごく、東京にどのぐらいいるんだろうかと僕は聞きながら考えていて、例えばちっちゃい頃からクラシック音楽に触れたりとか、あと、アートをやってきた人で、かつ、芸術大学を出たような人が持っている芸術感覚と、おそらくポップスしか聞かない人が持っている芸術感覚は恐ろしく違うという考え方がありますと。そうなったときに、例えばポップスはいつ生まれたんだろうと考えると、1880年代とか、1870年代とかのボストンのポップスのオーケストラとかがあったりとか、もしくは劇伴音楽の指揮者が、ジョン・ウィリアムズとかが例えばポップスオーケストラの指揮をやっていて、一般的にクラシック音楽で一般大衆向けの音楽をやるというような風潮が出てから非常に例えば文化的なミックスが行われたというアメリカの事例みたいなものがあるとすると。そういったことを考えた上で、逆に言うと、菊地さんがおっしゃっている「文化的な音楽」の「文化」というのはどういう価値観なのかなというのを僕なりにそしゃくしながら聞いていたんです。

文化って、取りあえず、まずいものをまずいと思わずに食べてみないと、おいしさが分からないじゃないですか。これは難しい話で、パクチーって食べ慣れないと食べられないみたいな。要は、塩辛も最初、食べたらずいんだけど、でも、食べてるうちにおいしくなるみたいなものの1つとして多分アートというのは結構あって、それをやるためにはアートをうまくやっていかないといけないんだけど、それっておそらく鑑賞教育が多分足りないというのが僕は公教育の中で一番大きな問題だと思っていて、例えばアートを描く時間はあっても、アートを見に行く時間はあまりなくて、その批評文を書いたことなんて多分ほとんどない。つまり、日本人って、おそらくアートや建築や、もしくは音楽のアクティビティに対する批評を行ったことが10回以内な人が大人になるんです、恐ろしいことにね。それは何とかした方がいいなと思います。そういう素地をつくると、割とみんな何かうんちくを語りたくなるという、そこからだと思うんですね、指が動かないまでも。そういうような授業を都でやるのはいいかなと思ったりしました。

【小池知事】 ありがとうございます。メイミさん、どうぞ。

【メイミ様】 メイミです。この「表現欲求（演じること）」というような言葉が出てき

ていますけれども、誰しも表現することに対して欲求があるのかなと思うんですが、例えばアート、絵画であったり、あとは音楽であったり、子供の頃、学校教育の中でどうしてもうまく描けることがいいというようなことだったり、上手に演奏ができることがいいという中でだんだん落ちこぼれていって、自分は下手くそだからということで芸術から離れていく人たちも多いのかなと思うんですね。

私も子供の頃、ピアノをずっと習っていたんですけども、ほとんど1オクターブやっ  
と届くかどうかぐらいの手でうまく弾けなくて、ずっとやっていたんですけども、今はほとんどピアノを触ることがなくて、もっと技術を磨いていって素晴らしい音楽であったりだとか、アートを発信していくものと、また、それとは別に、うまい、下手ではなくて、誰もが気軽に参加したり、触れ合える芸術・文化というものが2つ存在してもいいのかなということを感じました。

AIの話も出ていましたけれども、じゃ、うまい、下手が気になるのであれば、AIで何かサポートができれば、気軽に遊び感覚でできるのかなということも思ったり、あとは、高齢者の方で昔、ピアノをやっていた、先生をしていたという方が認知症を発症してピアノが弾けなくなってきてしまうというような方がいらっしやったんですけども、そういうときに、弾くことをやめてしまうんですが、ちょっとした工夫でサポートをすることでまた弾くことができたりするということもありますので、AIの活用だとか、サポートで弾くのが難しいなという方でも楽しめる環境、状況が出来てくるといいのかなと思いました。以上です。

**【小池知事】** 今日AIというのも大分キーワードになっていますけれども、昔はオーケストラは全部、全てフルで、フルオーケストラでもシンセサイザーとかはもう既に出てきているわけですけども、2050年ぐらいになるとどうなっているんだろう。何か想像できますか。

**【菊地裕介様】** まず、メイミさんのおっしゃっていた、すごく技術的に難しいものを求めると見てやるのが大変だと、それはおっしゃるとおりなんですけれども、じゃ、例えば何が難しいのかと。右手と左手でメロディーと伴奏とを弾くということが難しい。じゃ、右手でメロディーの一部だけでも弾けば、それをAIが酌み取って、その人の心の動きに合わせた音を何か演奏してくれるとかということは十分考えられるし、オーケストラについてもそうですね。自分一人でそのオーケストラの中の1つの楽器を、それも上手でもなくても弾くことによって、周りのみんながその人に合わせてくれているのと同じようなこ

とをコンピューターがやってくれるとか、だから、これはアシストなんですね。

だから、昔できたことが認知症でできなくなったというのも、多分それをアシストして、その人の音楽を通じての表現欲求というものをコンピューターによって引き出して、何か結果にするということは、大いに僕は可能性があると思うんですね。だから、今、技術のあるなしが障壁になっちゃっていて、それによって、音楽ができる人とできない人に分かち合っているのが少し変わっていくんじゃないかなと。

個人的な仕事の立場から申し上げますと、技術はあるけど、芸術性の低い演奏というのがやっぱりあるんですね。その反対に、技術はないんだけど、何か聞きたくなるなという演奏がやっぱりあるので、そこに文化というものの本質があるのかなという気はします。

【小池知事】 2050年、どうなっていますか。

【菊地裕介様】 やっぱり技術よりも、何を表現するか、その人の人間性を共有できると思うんですね。多くの人でそのようになっていけばいいなと僕は思います。

【小池知事】 あまり時代は変わらない、時代によって変わるものではないということね、本質は。

【菊地裕介様】 その部分は変わらないということです。

【小池知事】 変わらないですね。

【落合陽一様】 ちなみに、東京都の「東京文化プログラム助成」で、今年はオーケストラと一緒にプロジェクトをやっているんですけど、技術を一杯突っ込んで色々やろうというやつなんですけど、やっていて思うのは、オーケストラと仕事をすると、楽器と、あと、楽譜とかコンテキストに関する熱量が半端ないので、そこに手を入れるとすごく陳腐になるんですね、表現それ自体に。やっぱり思うのは、テクノロジーがそういう文化的なものに入ってきたときの一番越えないといけない障壁は、初学者が、もしくは我々の五感で感じ取れる時間方向のレベルでどうやって強調してあげられるかということだと思えます。

例えばマイクの発明というのは、音楽にとっては大分偉大で、それは、つまり、耳で聞き取れないようなものを再びミキサーにかけてミックスし直すと、いかにちっちゃい声量で歌っている人でも、例えばそこに合わさって歌えるとか、ギターというような大した音が出ない楽器が例えばメイン楽器になるような、もしくはそこに合わせてエフェクターをかけることでギターヒーローが生まれるみたいなことがあるような。だって、ギターはその前までも、すごくしょぼくはないです。すごくいい楽器だけど、音量のちっちゃい楽器なんですよ。そういうようなものをメインストリームにする程度のテクノロジー的なエン

パワーメントがあって、そういうようなものにどうやってタッチできるかということの方が実はテクノロジーには重要であると。

そうすると、今までオーケストラの中で見たことのない楽器の動きだとか、例えばオーケストラを見ていると、コントラバスが主体になっているときもあれば、ティンパニーが主体になっているときもなぜかあるみたいな、みんなティンパニーのことを気にしているなどと思うときがあったりとか、そういうような、あと、ソロパートになってくると3人ぐらいの人が、独奏楽器を振っているような人がここで関連していて、指揮者のことを誰も見ていない瞬間もあるし、そういうようなことをおそらくオケの中にいる人は感じながら演奏することで体感している。その瞬間は楽しい。でも、僕らにはコンテキストは共有されない理由は何だろうと考えると、解像度がちっちゃいからなんですね。オケの解像度はめちゃくちゃ細かいし、分かってないと分からない。スコアが分かっていたら、もちろんそこに意識を向けることができるんだけど、僕らがそれで接していて一番面白かったのは、シンバルの人とかについて、すごくほれ込むと、この人は1回しか音を鳴らさないのにどういう気持ちで待っているんだろうかというパーソナルヒストリーにここで変わると、すごくマインドセットが変わるんです。ということまでのめり込んでオケに行けば結構楽しいんですけど、それって教育の問題じゃないですか。そういうストーリーが全員に共有されていれば、来るか、居合切り、来た、来た、来た、オーケー、パッションみたいな感じのことがないですよ。これは僕の中ですごく、最近よく仕事をしていてあることです。

これは太田さんは、料理、そうですね。

【太田雄貴様】 料理？ 料理について話すの？ 僕は。

【落合陽一様】 料理について。

【太田雄貴様】 料理じゃなくて、フェンシングで話しましょうか。今、まさに僕らが取りかかっているのはビジュアル、可視化させることなんですね。今年の大会なんかは、心拍数を出そうかという話をされていて、その選手がどういうことを考えているんだろうとか、要は、ルールがもう分かりにくいのは前提として、そこにあるストーリーをどうつくってあげるかということがすごい重要なんだろうなと。さっきのシンバルの話聞いて、まさになと思って、例えば審判の心拍数でさえはかっちゃおうかと思って、審判、緊張しているなと思うと、お客さんもそれが伝わってくるわけですね。そういうふうにスポーツの見方とかを違う切り口からつくっていくことというのはすごく重要だろうと思っています。



僕は、あと、今回このビジョ懇とかに本当に感謝しているのは、それこそ色々な人と会うことができたという機会は本当に知事には感謝しているんですけど、それこそ、田根さんと僕はパリで会ったりとかして、一緒に美術館回ったりとか、さっき落合君も言ったと思うんですけども、そういうことを僕は教育でやっていなかったの、どういうふうに見ていいんだろうとか、どういうふうな感想を持っていいんだろうとか、そういう本当に経済価値だけでこの絵が、バスキアの絵が123億ですみたいな、そんなところしかニュースにならない。そうすると、やっぱり高いものもいいみたいなものでしか文化の升を持っていない日本人というのは、僕はものすごく乏しいなと思ったんです、自分自身のことを。そういうふうな中でも、この絵とか、このアートってどうなんですかと田根さんに全部、僕はLINE（ライン）で教えてもらって、ここはこう見るんだよみたいな形で、そうすると、やっぱり価値観が変わってくるので、お金じゃないものの楽しさとか、多分そういう色々なものとのタッチポイントをどれだけ子供たちにつくってあげるかというのはすごく重要だと思います。

ただ、日本は、娯楽が多い国だと思うので、ゲームもすごい発展しているし、スポーツのライバル。僕はフェンシングの一番のライバルは実は携帯ゲームだと言われたことがあって、どれだけ携帯ゲームと戦う気持ちでやるか、ほかの競技団体と競っているとか、そんなんじゃないんだよと言われたときに、すごい分かったんです、何となくね。だから、やっぱり会場まで行くとか、もっと言うと試合を自分でやるとかというのよりは、それはもうスマホを開いたら即刻で楽しむのが始まると。そうしたら、ここよりもより楽しい体験とかを提供し続けないと、子供たちを引っ張っていくことはできないだろうなと思ったので、ちょっと規模感は違うけど、ピアノと相通ずるところがあったので思いました。

【小池知事】 その心拍数も出しちゃう、面白いですけどね。お相撲もそういう具合にテクノロジーを入れたらどうなる。

【長谷部健様】 e ゲームなんか、ばんばんそっちへ行きそうだね、多分。

【太田雄貴様】 e スポーツ、今、一番人口が多いですからね。

【長谷部健様】 e スポーツ、そうだよ。

【太田雄貴様】 全てのスポーツで。

【小池知事】 宿輪さん、お願いします。

【宿輪理紗様】 宿輪です。菊地さん、お話、ありがとうございました。やっぱり芸術と言うと教養が高い人がやるみたいなイメージがあって、子供の頃からピアノを習ってい

ましたとか、バイオリンを習っていましたと言うと、すごい、お嬢様とか、特に音大出身ですとか言う、何しゃべって、ピアノの話しかしちゃいけないのかなというぐらい、相手に少し気を遣ってしまうようなイメージがあるんですけども、そういうイメージをまですなくすところから始めようというのは、先ほど皆様お話しされていたと思います。

私は子供の頃にマンドリンの演奏を聞きに行ったことがあって、その時に、子供にマンドリンを親しませようということだと思っただけなんですけれども、誰か指揮をやりたい人はいますかということで、私は挙手して壇上に上がったんです。その時に、こうやるんだよと言って、私が4拍子とかやったんですけども、マンドリンの方は面白がって勝手に演奏するんです。それで私は戸惑ってしまったんですけども、最終的に、私が4拍子とかすると合わせてくれて、すごい楽しかったという思い出があります。ですので、子供の頃にやはりわざわざそういう演奏を聞きに行くという、わざわざ感がないようにするというのが一番重要だなと思いました。

子供の頃で言うと、すごい低レベルになってしまうかもしれないんですけども、例えば砂場で泥だんごをつくるとか、雪でかまくらをつくるとか、そういうのも芸術の第一歩だとは思っています。なので、そういうところから子供にアートとか、文化とか、そういうところの第一歩を、勉強というわけじゃないんですけど、触れさせるというのはいいのかなと思いました。

**【小池知事】** ありがとうございます。では、海の神、山の神、行きますか。じゃ、海の神。

**【西田圭志様】** 西田です。海と言うか、島に住んでいるとすごいこういうのに、演奏もそうだし、博物館や美術館もそうだし、そういう所に行く機会はすごい少なくなってしまうので、このまま菊地さんがおっしゃったように余暇時間とかが増えていって、そういう文化的なことに費やす時間が増えていったときに、島に住んでいるのと都内に、両方都内ですけど、島以外に住んでいる人たちだとすごい差がついてしまうと思うんです、その機会の差で。なので、島にいても例えば都心のライブを一緒に感じられるような科学技術とか、そういうのを積極的に取り入れていく必要があるんじゃないかなと思います。

**【小池知事】** ありがとうございます。山の神。

**【青木亮輔様】** 僕は山の方に住んでいるので、そこから今日も出てくるのは、今日はお酒を飲むというのもあったんで電車で来たんですね。そうすると電車がめちゃくちゃ苦痛なんです。おそらく乗っている人、みんな苦痛だからスマホを見るし、音楽聞くしとや

っていると思うんですね。

先ほど太田さんも可視化するとかというお話をされていて、この間、大会をご案内いただいて見に行って、太田さんがフェンシングについて、見どころについて説明をしてくれました。そういったことは、知ったから、その見どころを教えてもらったから、それがうまく理解できたんですけど、芸術とかって僕なんかはなかなか縁がないので、電車に乗った車両で例えばですけど、一番オフピークの混んでいない時間帯の1日1車両でもいいかもしれないですけど、そういったところに誘導する1つのきっかけとして、車両ごとに例えばクラシックの車両があったり、演歌の車両があったりとか、アニメソングの車両はあったり、本当に色々なジャンルがあって、アニメソングの車両がすいているから入ってみようかなと。そんなの聞く機会ないんだけど、聞いたら、すごい面白いなとかというふうになるかもしれないし、クラシックの車両はすいているから、そっちへ行ってみようかなとかと、色々なことに例えばそこで触れるような機会が自動的にあって、その短い間でもそういうのに触れて、自分にとってきっかけ、最初のワンステップ、未知のところへのワンステップが自動的に感じられるといいし、そういうのが楽しいと思って通勤時間をずらして、結果平準化していくとか、何かそういうのも楽しいのかなと思って、そこが本当の演奏を車両でやるのはちょっとどうかと思いますけど、そういうのが自動的に色々な所で触れ合えると、僕なんかからすると電車に乗った時はすごく楽しい時間になるし、プラスになるかなと何となく思いました。

【小池知事】 鉄道事業者に言うておきます。田口さん。

【田口亜希様】 どうしても文化とか、芸術とか言うと、本当私たちにはハードルが高いなと思って、この間、菊地さんのコンサートを聞きに行かせていただいて、こんなにうまく弾けたら素敵だなとかいうふうに思ったんですね。この間、年末年始、実家は大阪なんですけど、帰っていたら、荷物の整理をなささいということで母に言われて整理していたら、私が幼稚園の時に描いていた絵が出てきまして、ガラスになぜか描いているんですね。自分の中ではゾウを描いているんです。それは表彰みたいな、何かすごく良くされて、母がそれを見て、あなたのこの芸術的センスは幼稚園で終わったよねと言われたぐらい、その後がなかったんですけど、そんな感じで、なぜかそのゾウを見ても、私には今、ゾウには見えないんですけど、あの時はすごく褒められたというのは覚えているんですね。でも、先ほどメイミさんもおっしゃったとおり、なぜかどんどん年を重ねていく、小学校に入ったら、うまくそれを模写しなきゃいけないなかったり、描かなきゃいけないというのがす

ごく日本ではあるのかなと思いました。

ピアノも、私も習っていたんですけども、両手になってからちょっとできなくなって、やっぱり先生がすごくうまく弾けてないとか、すごい怖かったというので、自分ができなくなってしまった部分があって、でも、今、私たち、パラリンピックの競技団体が入っているパラリンピックサポートセンターというのがありまして、その壁画が香取慎吾君が描いている絵がば一つとあるんですね。この間、自分のゾウを見て、そんなに変わらないなと思ったんですけども、この評価というのが、じゃ、何なんだろうというのを思いました。

ですので、私も、2020年に向けて今、色々な文化のプログラムがあったり、委員会、審査会とかがありまして、どうしても型にはまった審査をしたり、評価をしたりする傾向があるので、是非せつかく東京でこれだけ色々な、さっきおっしゃったサブカルチャーとか、色々なことがあるわけですので、そういう型にはまったのではなくて、2020年、そして、それ以降にも続けられるような、もっと多様性みたいな、パラリンピックもそうなんですけれども、多様性とか価値観をもう少しまたちょっと変えて、やっていけるのにしていきたいというのが、そうしないと2020年以降も、せつかくなのに、これだけやっているのに続かないんじゃないのかなと思いましたし、私ももう一度、絵が描きたくなってきたなと思いました。

**【小池知事】** ありがとうございます。文化・芸術、非常に幅が広いので、なかなかどこから切り込んでいいか難しいところですが、2050年、日本が世界の芸術や文化、ちゃんと引っ張れるような、そういう人材が輩出されたり、それを生み出す東京であったりしてほしいなと思いました、皆さんのお話を聞いて。

それにしても、皆さんはこの場で知り合って、色々な所で一緒に活動しておられるのを垣間見て、大変うれしく思いました。全然多様性じゃないですか。お仕事とかね。是非そういうジャンルが違う皆さんが一緒になって東京のことを考えてくださって、それがイコール日本のことになると思いますけれども、それでいい刺激のある2050年像というのを是非つくっていただきたいと思っております。

さて、それじゃ、何か言い残したことはありませんか。

**【落合陽一様】** ちょっとアートについて、もう一言、二言言いたいことがあって。

**【小池知事】** どうぞ。

**【落合陽一様】** 『枕草子』の時代はとか言って、いきなり訳の分からないことを言い

ますけど、「〇〇は良い」と言うことは、いいことだと思うんですね。『枕草子』が何で出てきたのかと言うと、『枕草子』は例えば何段かに分かれていて、最初の方と言うか、美しきものについてずっと言っている所があるじゃないですか。かわいいものと言えは何か、きれいなものと言えは何かとか、あれは清少納言さんが思ったことをつらつら書いているわけですけど、現代日本人、ああいう習慣があまりないんですね。これは結構問題で、だって、例えばヨーロッパって、文化が、アートが、もしくはサイエンスが、もしくは芸術が社会の中に溶け込んでいるというのは、何だかんだ、批評性を全ての人が持っているということが当たり前で教養であると思われていて、そこに対してポジションを持たないことが大人になっていないと多分思われていると僕は思っているんです。

そういったときに、例えば建築を見たときに、この建築は何かいいよねと言う。でも、逆に言うと、例えば皆さん何か趣味とかがあったら、これはたまらなく僕らにとっては良いんだと言うじゃないですか。例えば僕だったら、ジミー・ヘンドリックスのギターを聞いたら、これは言葉に表現できないけど、非常に良いものなのだという感じがある。人によっては、器を見て思うかもしれないし、人によっては、安藤忠雄の建築物の中に入ったときに思うかもしれないし、人によっては、ワサビをそのまま食べたときに思うかもしれないわけです。でも、これは多様な五感の感覚を色々な意味で使って、習熟して行って、その習熟、みんなが価値を最初は思っていなかったものを、みんなが価値があると思っただけで、何らかの人間性の裏返しとして出てきた物証的な表現だったりとか、空間だったりするものをたしなんだりとか、めでたりとか、言語化したりとかするような活動というのが、いまいち日本人はしないなと思っていて、何百年に1回ぐらい、そういうのっていいよねと言う人が出てきて、例えば本居宣長が出てきて再評価されたりとか、世阿弥が出てきて言ったりとか、例えば岡本太郎が出てきて縄文土器がなぜか復活したりとか、そういうようなサイクルって、すごく僕は大切だと思っていて、だから、どうやったら、この分野で、もしくは自分が好きなものを、今は誰も好きだと言っていない好きなものを好きだと分かりやすく説明できるかということの方が文化的には重要なんじゃないかと思っただけで、そういうプログラムと言うか、鑑賞体験みたいなものを入れないと、20年しても同じことをしてそうだなと思っていて、「アートって難しいよね」と言っていそう。でも、それは非常に嘆かわしいので、何となく30年以内には、小学校でそういうのをやったから、「好きなものについてそうやって言うこと」というのが普通に「いいよね」と言われるようにしたいんですということだけ残しておきます。

【小池知事】 ありがとうございます。今はTwitter（ツイッター）で「いいね！」をばちっと押すという、そんな「いいね！」というのが……。

【落合陽一様】 「いいね！」は違うんですよ、何か。「いいね！」をばちっと押すというのではなくて、何らかの形で言語化して出てきたピースがそろっていると、この人というのはこういう人間だったんだというのが後で分かるみたいな感じなんです。

【小池知事】 そうですね。まとまって、今、ツイッターは140字じゃない。それだから、細切れになっちゃっていて、そして、パッチワークみたいな形でしかないということなんだろうと思いますが、政治の分野でも、例えばシラク氏、昔、パリ市長だったじゃない。それでその後、大統領になったシラクさんとか、あと、ドイツの首相だった方、シュレーダーじゃなくて、コールさんとか、ピアノがとても上手だったり、それから、シラクさんは相撲の造詣が深かったり、それから、縄文土器か何かのことをとても詳しくあったりというようなことで、政治家もそういう深い、芸術とか文化について1時間でも2時間でも話せるような人って世界のリーダーに多いなというのをつくづく感じるんです。ですから、そういう中で東京の文化や歴史、文化や芸術をどうやって残していくのかという、そんなことも皆さんの感性でこれからも、この後も皆さんに今度はお任せしますけれども、深めていっていただきたいと思っております。

では、今日は皆さんのご意見、菊地さんのプレゼンテーションをベースにしたご意見はここまでにいたしまして、一旦、事務局の方に戻したいと思っております。皆さんご協力、ありがとうございました。

【岩瀬次長】 どうもありがとうございました。それでは、以上をもちまして、菊地様のプレゼンテーションと意見交換については、これにて終了とさせていただきます。

これより懇談会のアウトプットに関する意見交換に入ります。恐れ入りますが、知事は所用のため、ここで退出をさせていただきます。

【小池知事】 それじゃ、後は皆さんよろしくお願ひします。色々よろしく。どうもありがとうございました。

（ 小池知事退室 ）

【岩瀬次長】 ありがとうございます。なお、本日はアウトプットに関して自由闊達な意見交換を行うため、大変恐縮ですが、報道機関の皆様はこれにてご退出をお願いいたします。

— 了 —